

[D年] 聖霊降臨節第3主日(2024年6月2日)**【旧約聖書日課】申命記6章17～25節**

17あなたたちの神、主が命じられた戒めと定めと掟をよく守り、18主の目にかなう正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸いを得、主があなたの先祖に誓われた良い土地に入って、それを取り、19主が約束されたとおりに、あなたの前から敵をことごとく追い払うことができる。20将来、あなたの子が、「我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか」と尋ねるときには、21あなたの子にこう答えなさい。「我々はエジプトでファラオの奴隷であったが、主は力ある御手をもって我々をエジプトから導き出された。22主は我々の目の前で、エジプトとファラオとその宮廷全体に対して大きな恐ろしいしるしと奇跡を行い、23我々をそこから導き出し、我々の先祖に誓われたこの土地に導き入れ、それを我々に与えられた。24主は我々にこれらの掟をすべて行うように命じ、我々の神、主を畏れるようにし、今日あるように、常に幸いに生きるようにしてください。25我々が命じられたとおりに、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に言うよう注意するならば、我々は報いを受ける。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙10章5～17節

5モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています。6しかし、信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。7また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。8では、何とされているのだろうか。

「御言葉はあなたの近くにあり、

あなたの口、あなたの心にある。」

これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。9口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。11聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。12ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

14ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。15遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。16しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。17実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書3章1～15節

1さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。2ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」3イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」4ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょうか。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」5イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。6肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。7『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。8風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりでである。」9するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえますでしょうか」と言った。10イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。11はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。12わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。13天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。14そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 6章17～25節

17あなたがたの神、主の戒めと、命じられた定めと掟を固く守り、18主の目に適う正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸せになり、主があなたの先祖に誓われた良い地に入り、これを所有して、19主が語られたとおり、すべての敵をあなたの前から追い払うことができる。

20もしも将来、あなたの子が、「私たちの神、主が命じられた定めと掟と法とは何のためですか」と問うならば、21あなたの子にこう答えなさい。「私たちはエジプトでファラオの奴隷であった。しかし主は、力強い手によって私たちをエジプトから導き出した。22主は私たちの目の前でエジプトに対し、すなわち、ファラオとそのすべての家に対して、大いなる恐ろしいしるしと奇跡を行い、23私たちをそこから導き出した。それは私たちを導いて、私たちの先祖に誓われた地を与えるためであった。24そして主は、私たちにこれらの掟をすべて行うように命じ、私たちの神、主を恐れ、今日あるように、いつも幸せに生きるようにしてくださった。25命じられたとおり、私たちの神、主の前で、この戒めをすべて守り行うならば、それは私たちにとって義となるであろう。」

ローマの信徒への手紙 10章5～17節

5モーセは、律法による義について、「律法の掟をおこなう者は、その掟によって生きる」と書いています。6しかし、信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『誰が天に上るだろうか』と仰ってはならない。」それは、キリストを引き降ろすことです。7また、「『誰が底なしの淵に下るだろうか』と仰ってはならない。」それは、キリストを死者の中から引き上げることです。8では、何と仰っているのでしょうか。

「言葉はあなたのすぐ近くにあり、あなたの口に、あなたの心にある。」

これは、私たちが宣べ伝えている信仰の言葉です。9口でイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです。11聖書には、「主を信じる者は、誰も恥を受けることがない〔別訳→失望することがない〕」と書いてあります。12ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。すべての人の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者は皆、救われる」のです。

14それでは、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がいなくて、どうして聞くことができるでしょう。15遣わされないで、どうして宣べ伝えることができるでしょう。「なんと美しいことか、良い知らせを伝える者の足は」と書いてあるとおりです。16しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、誰が私たちの知らせを信じましたか」と言っています。17それゆえ、信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉によって起こるのです。

ヨハネによる福音書 3章1～15節

1さて、ファリサイ派の一人で、ニコデモと言う人がいた。ユダヤ人たちの指導者〔別訳→議員〕であった。2この人が、夜イエスのもとに来て言った。「先生、私もは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなされるようなしるしを、誰も行うことはできないからです。」3イエスは答えて言われた。「よくよく言っておく。人は、新たに〔別訳→上から〕生まれなければ、神の国を見ることはできない。」4ニコデモは言った。「年を取った者が、どうして生まれることができましょう。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。」5イエスはお答えになった。「よくよく言っておく。誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。6肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。7『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。8風〔別訳→霊〕は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」9するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。10イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。11よくよく言っておく。私たちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたは私たちの証しを受け入れない。12私が地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。13天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者は誰もいない。14そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたとように、人の子も上げられねばならない。15それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである〔別訳→人の子を信じる者が皆、永遠の命を得るためである〕。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・6月2日「聖霊降臨節第3主日」の日課主題は「神の民の誕生」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、律法授与および遵守の目的を子孫に伝えるべきことを告げる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、御言葉の内面化と信仰告白の関係を語る箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、ニコデモの逸話箇所。

旧約日課(申命記 6章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第五巻として置かれた文書。「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。本書の大部は、自らの死期を悟ったモーセがエジプトから導いてきたイスラエルの民に対して最後の「訣別説教」として語ったものとして構成されており、出エジプト以来の旅を振り返りつつ、シナイ山で授与された「十戒」をはじめとする「律法」を再告知する形式で編集されている。本書は、前6世紀のバビロン捕囚を経てペルシア支配下の時代に「ユダヤ宗教共同体」が形成されるに際して一翼を担った祭司＝預言者集団によって為された正典編纂作業で、現在知られる文書構成が完成したと考えられるが、その原資料の起源については何も確定的なことが言えない。一説によれば、「列王記下」22章に描かれる「ヨシヤ王の改革」の発端として描かれる「律法の書」の発見で見いだされた文書が「申命記」の中核部分(「原申命記」)であったとされる。これは、ペルシア支配下の時代に「ユダヤ宗教共同体」の一翼を担った祭司＝預言者集団が自らの主張する「神の言葉」に基づく共同体統治を根拠づける「律法の書」を体系・公開化していく上で歴史的正当性を示すための故事と解される。その中核に「申命記的神学」を共有していた集団を想定して、学者らは「申命記史家」あるいは「申命記史観」を提起してきたが、異論もある。

・「申命記」は、同じように「十戒」をはじめとする「律法」授与の物語を描く「出エジプト記」と比較したとき、「神の言葉」の公開性という特徴が際立っている。「出エジプト記」では、「神」あるいは「神の言葉」に人々が接するためには、モーセのような「祭祀王」あるいはアロンのような「祭司」が重要な役割を担う者とされているが、「申命記」では、「神の言葉」はすでに人々に与えられているものであり、むしろ人々は自分たち自身でそれを子々孫々語り継ぎ、守るように教える役割を期待されている。つまり、「申命記」は、ある種の「全信徒祭司性」を基本概念としており、後のユダヤ教における祭司抜き信徒団体としての「会堂共同体」の形態を生み出す基礎となっている。

・日課箇所のように、親子の対話形式で律法遵守の信仰継承を促す様式は、「申命記」以外でも、「出エジプト記」の「過越伝承」(出12章)などにみられる。

使徒書日課(ローマ10章)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマにある教会共同体に宛てて、自分のローマ訪問計画とその後のエスパニア宣教計画を伝え、受け入れと事業支援を求めて書き送った。パウロとローマの教会共同体との関係性は、本書簡以外の文書からはほとんどうかがい知れないが、数少ない重要な情報として、「使徒言行録」18章のコリント伝道に関する逸話の中に、ローマから移住してきていたユダヤ人夫妻アキラおよびプリスキラとの協力関係が見て取れる。その記述によると、この夫妻は、クラウディウス帝の命令によりローマ市域からユダヤ人が退去させられたことに伴い、コリントに一時的に移住してきていた。この皇帝の命令については、聖書外史料から、「ユダヤ人の中でクレストスという奴隷を巡って対立があり、混乱が生じていることへの対処」として発せられたものであるとされている。キリスト教会では、これが「キリストス」つまり「キリスト」を巡ってのユダヤ人間での対立であったと推認し、当時のローマ市域に居住していたユダヤ人社会の中に一定のキリスト者グループの広がりが見られたことの帰結であったと解してきた。「使徒言行録」には、ローマにおけるキリスト教会の形成発展についてほとんど触れていないが、巻末にはパウロがローマ訪問した際に当地のキリスト者らが受け入れたことを伝えており、おそらく、シリア・アンティオキアと同様に同様の教会形成・発展が進んでいたであろう。その経緯が描かれないのは、「使徒言行録」自体がローマの教会共同体の立ち位置から叙述されたからかもしれない(そうであれば、既知の自分たちの草創譚を描く必要はないと考えられたであろう)。パウロは、シリア・アンティオキア教会の派遣するバルナバ宣教団の一員として活動を始め、その後、独自の宣教団を組織して活動した時期を経て、再び使徒らを中心とした教会共同体ネットワークの中で調停的な立場を取り、歩調を合わせるようになった。使徒ペトロを中心に教会共同体ネットワークの中で盟主の地位を築き始めていたローマの教会共同体に対して、パウロは、自分の調停的な立場を神学的な論拠に立って説明し、殊にユダヤ人と異邦人の統合的な救済神学を提示することで、自分の宣教活動への支持および支援を取り付けようと考えたのであろう。

・本書で、パウロは多数の旧約箇所を引用しているが、日課箇所にも見られる。5節←レビ記18:8、6~8節←申命記30:12~14、13節←ヨエル書3:5、15節←イザヤ書52:7、16節←イザヤ書53:1。

・9節/10節「口で公に言い表し」は、ギリシア語「ホモロゲオー」の訳で、原義は「一致して/一貫して言う」。教会史上では、共同体的な告白、あるいは永続的な告白を示唆する語として、「信仰告白(する)」の意味で用いられてきた。

福音書日課(ヨハネ 3 章より)

・日課箇所は、いわゆる「ニコデモの逸話」を伝える箇所。ただし、「ニコデモの逸話」を伝える説話は、おそらく 10 節までで、11 節以下は福音書著者(=説教者?)の解説と考えられる。本福音書では、逸話(説話物語)の延長で主イエスの長大な教えが展開されたり、福音書著者の解説が展開される例が少なくなく、本福音書の典型的な様式となっている。

・「ニコデモ」は、「ヨハネ福音書」だけに登場する「イエスの隠れた弟子」の一人で、ユダヤ人たちの議会で議員として発言している様子が描かれたり(7:50~51)、「アリマタヤ出身のヨセフ」と共に十字架上で死んだ主イエスの遺体を引き取り墓に葬った者としても伝えられている(19:38~39)。「ヨハネ福音書」を生み出した「ヨハネの教会共同体」と行動を共にした結果、彼に関する逸話伝承が本福音書に採用されることになったのだろう。日課箇所で「イスラエルの教師(ディダスカロス)」とも呼ばれており、彼らの神学的基礎を提供する存在であったとも考えられる。「教師(ディダスカロス)」は、「ラビ」を説明するギリシア語であり(1:38 参照)、ニコデモも「ラビ」と呼ばれる立場であったものと考えられる。なお、「ラビ」が音訳で用いられるのは、「ヨハネ福音書」では 8 例中 7 例が主イエスに対して、残りの 1 例は洗礼者ヨハネに対して。

・3 節/5 節/11 節「(あなたに)ははっきり言うておく(アメン・アメン・レゴー・ソイ)」は、「(あなたがたに)ははっきり言うておく(アメン・アメン・レゴー・ヒューミン)」と共に、「ヨハネの福音書」で多用される主イエスの常套句とされる表現であるが、福音書著者の解説と思われる部分でも用いられており、本福音書著者(ヨハネの教会共同体/使徒ヨハネ?)の常套句と見るべきかもしれない。

・主イエスとニコデモの対話は、キリストに従う者たちの受ける「洗礼」において働く「霊」についての教えを示すための逸話として置かれていると解せるが、「洗礼」について明示しているわけではない。しかしながら、教会史上、この箇所は「洗礼」における「新生」の意義を示す箇所としても解されてきた。

来週の誕生日 (6 月 2 日~8 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-353 番「父・子・聖霊の」(= I-70 番「父、み子、み霊の」)は、9 世紀スミルナの司教メロファネスの作とされる讃美歌。曲は、ジュネーブ詩編歌から。
- ・21-60 番「どんなにちいさいこりでも」(= 58)は、1966 年版『こどもさんびか』の増補版として 1983 年に出版された『こどもさんびか 2』のために作詞作曲された。作詞は、幼児教育とその指導者育成に携わった菅千代。作曲は、作曲家・広瀬量平。
- ・21-347 番「たたえよ、聖霊を」は、20 世紀英国教会司祭で讃美歌作家のヒューレットが自身の牧する教会のために聖霊降臨日の入堂讃美歌として作詞。

曲は、現代米国の教会音楽家デイヴィッド・ハードがこの詞のために作曲。

- ・21-73 番「主よ、平和のうちに」は、19-20 世紀ドイツの讃美歌学者シュピッターが 16 世紀の宗教詩人 J. エングリッシュの「シメオンの讃歌」に基づく詩を改作した歌詞。曲は、ルターと同時代のドミニコ会修士オルガニストのダハシュタインの作曲。22 番も作曲。

21-353「父・子・聖霊の」

English translation by Rev. John Mason Neale

O Unity of Threefold Light

1. O Unity of threefold light, / Send out Thy loveliest ray, / And scatter our transgressions' night, / And turn it into day; / Make us those temples pure and fair / Thy glory loveth well, / The spotless tabernacles, where / Thou may'st vouchsafe to dwell.
2. The glorious hosts of peerless might, / That ever see Thy face, / Thou mak'st the mirrors of Thy light, / The vessels of Thy grace. / Thou, when their wondrous strain they weave, / Hast pleasure in the lay: / Deign thus our praises to receive, / Albeit from lips of clay.
3. And yet Thyself they cannot know, / Nor pierce the veil of light / That hides Thee from the Thrones below, / As in profoundest night. / How then can mortal accents frame / Due tribute to their King? / Thou, only, while we praise Thy name, / Forgive us as we sing. Amen.

21-347「たたえよ、聖霊を」**Praise the Spirit in creation**

1. Praise the Spirit in creation, / breath of God, life's origin: / Spirit moving on the waters, / quickening worlds to life within, / source of breath to all things breathing, / life in whom all lives begin.
2. Praise the Spirit, close companion / of our inmost thoughts and ways; / who, in showing us God's wonders, is himself the power to gaze; / and God's will, to those who listen, / by a still small voice conveys.
3. Praise the Spirit, who enlightened / priest and prophets with the word; / his the truth behind the wisdoms / which as yet know not our Lord; / by whose love and power, in Jesus / God himself was seen and heard.
4. Tell of how the ascended Jesus / armed a people for his own; / how a hundred men and women / turned the known world upside down, / to its dark and furthest corners / by the wind of heaven blown.
5. Pray we then, O Lord the Spirit, / praise the Father, praise the Word, / Source, and Truth, and Inspiration, / Trinity in deep accord; / through your voice which speaks within us / we, your creatures call you Lord.

21-73「主よ、平和のうちに」**Im Frieden dein, o Herre mein**

1. Im Frieden dein, o Herre mein, / lass ziehn mich meine Straßen. / Wie mir dein Mund gegeben kund, / schenkt Gnad du ohne Maßen, / hast mein Gesicht das sel'ge Licht, / den Heiland schauen lassen.
2. Mir armem Gast bereitet hast / das reiche Mahl der Gnaden. / Das Lebensbrot stillt Hungers Not / heilt meiner Seele Schaden. / Ob solchem Gut jauchzt Sinn und Mut / mit allen, die geladen.
3. O Herr, verleihe, dass Lieb und Treu / in dir uns all verbinden, / dass Hand und Mund zu jeder Stund / dein Freundlichkeit verkünden, / bis nach der Zeit den Platz bereit / an deinem Tisch wir finden.